

研究室紹介

大学院人間文化研究科・比較社会文化学専攻
助教授 天野 知香

「美術史」研究室というところ

本学の文教育学部のなかで、「哲学」「倫理」とともにひとくくりになった「美術史」というコースが、何をやるどころなのかを説明できる人は多くないだろう。かくいう「美術史」コースの人間でさえ、こころもとない。もともと学問の枠組みや定義云々は、それにかかわる各人の考え方や欲望の問題でもあるだろうから、一般的にそれの問題にすることにさして意味があるとも思えない。ただ、学内で道に迷わない程度にその看板の内容を理解していれば十分だろう。

とりあえず「言えるのは「美術史」では主にイメージを扱うということである。「美術」という言葉にこだわってはいけない。たしかに「美術史」で学ぶ学生の中には美術館に鎮座している「名作」を研究する者も多いが、広告のイメージを題材に卒論を書く学生もいる。私たちが日常的にさらされている広告のイメージが何をどのように伝えようとしており、どのように受け取られているかを考えることは、レンブラントの真作を見分けることやレオナルド・ダ・ヴィンチの作品を分析するのと同じように意味がある。さらに言えば「美術」という概念自体が何時どのように生まれ、どのように使われてきたかを調べることも意味が

あるし、「名作」を「称賛」することは社会的にどのような意味をもち、またどのように意味がないのかを問いたとしても構わない。

私たちの日常にイメージは欠かせないが、それはどのように使われ、どのように受け取られているのだろうか？ 私たちは小学校で読むことを学ぶが、イメージを見てその意味を読み取るやりかたは必ずしも学ばない。それにもかかわらず、イメージは文字と同じように私たちの周りにあふれ、私たちはそこからメッセージを受け取ったり、好悪を感じたり、あるいはそれによって何かを伝えたりしている。

したがって、おそまきながら私たちの周りに存在するイメージとその意味や機能、そしてそれをとりまく制度や概念を考える場所がこの研究室であると、とりあえずは言うことができるかもしれない。とはいえ、これが唯一の正解というわけでもない。

毎年この研究室に入ってくる学生ひとりひとりの関心や活動が「美術史」コースの内容を形作っている。彼女達の関心は「泰西名画」や仏教絵画から村上隆におよび、そのアプローチもさまざまである。人々との議論を可能にするための論証や歴史的な証拠を用意しさえすれば、研究室ではさまざまな問いが歓迎される。西洋絵画に女性の裸体がたくさん描かれるのはなぜか。伝統的に「巨匠」といわれる人に男性が多いのはなぜか？ 模様と絵はどが違うのか。宗教的なイメージはどのように「使われ」たのか？

「美術史」の人間にとって研究の対象と

なる「作品」がおかれる「美術館」は、足しげく通うおなじみの場所となるが、「美術館」の展示とはどのようなものか、それはどのような意味を持っているのか、さらには「美術館」とはどのような制度なのかを疑問に思うことも必要だろう。

従来の美術史はどちらかといえば絵を囲む額縁の内側が問題になっていたといえるかもしれない。しかし現在の私たちにとってはいわば額縁の内側も外側ともに考える対象になっている。イメージの問題はそれほどわたしたちの生きる毎日と結びついたものだからである。

天野知香助教授 プロフィール

専門分野／西洋近代美術史、主な担当授業科目／西洋美術史特講義、美術史学演習（大学院および学部）、主な研究課題／一九世紀及び二〇世紀のフランス美術、特に一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのフランス社会に於ける「芸術」をめぐる概念の位相と芸術運動を巡る言説の動態、制度の変化と作品研究、アンリ・マティス研究、所属学会等／美術史学会、日仏美術学会、イメージ&ジェンダー研究会、主な著書（著書）◆朝日美術館アンリ・マティス（単著）朝日新聞（1997）◆「西洋美術史ハンドブック」（共著）新書館（1997）◆「美術とジェンダー」（共著）ブリュッケ（1997）◆「女性の芸術—八九〇年代の二つの展覧会と芸術技術振興運動—」（明治学院論叢、芸術学研究）5・1・24（1996）◆「一九一〇年代末から一九二〇年代前半のフランスにおける批評の文とマチスの芸術」（『美術史研究年報』14号別冊）47・67（2009）◆「テホラ・シルヴァーマン・アル・ヌーヴォー」青土社（2009）◆「第14回日仏会期がおくる文化講座—日本美術の西洋受容—マチスの受容」（2009）◆「フリダ・カストン美術師土曜講座—20世紀を開いた革命家たち、マチスとモダニズム—」（2007）

受賞・表彰 第5回鹿島美術財団賞（一九九八年）